

## 最も重要な掟

井 口 智 子

奨励者紹介[いぐち・さとこ]

日本キリスト教団河内松原教会牧師

彼らの議論を聞いていた一人の律法学者が進み出、イエスが立派にお答えになったのを見て、尋ねた。「あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか。」イエスはお答えになった。「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない。」律法学者はイエスに言った。「先生、おっしゃるとおりです。『神は唯一である。ほかに神はない』とおっしゃったのは、本当です。そして、『心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして神を愛し、また隣人を自分のように愛する』ということは、どんな焼き尽くす献げ物やいけにえよりも優れています。」イエスは律法学者が適切な答えをしたのを見て、「あなたは、神の国から遠くない」と言われた。もはや、あえて質問する者はなかった。

(マルコによる福音書 12章28—34節)

### 今日は何の日ですか。

唐突ですが、今日6月20日は何の日かご存知ですか。ネットで検索すると、6月20日はペパーミントデー、世界難民の日などがありました。ペパーミントデーは北海道北見市のまちづくり研究会が、同市特産がハッカ(ペパーミント)なので、6月の北海道の爽やかさがハッカそのものであること、20日(ハツカ)との語呂合わせから、この日に制定しました。北海道以外の人に北見市の説明をする時、流水と刑務所で有名な網走から内陸に50キロのところにあると位置説明をすることが多く、それは市民にとって悲哀であったそうです。その悲哀を解消したため、まちづくり研究会が発足し、キャッチフレーズ「ハッカで、さわやかな香りのまちづくり」のもと、ペパーミントデーが制定されたとのこと。また世界難民の日は、もともとはアフリカ統一機構難民条約を記念する日であったのを、世界的な視野で難民への関心を深め、NGOの活動に理解と支援を深めるため、国際連合総会の決議を経て制定されたそうです。北見市のこともアフリカの難民のことも、どちらの場合も私自身の日々の生活では目にすることや耳にすることはほぼなく、知らなかったことです。自分とはほとんどかわりがないところで、何が起きていたのか、何が起きているのかを知るということは、「気づき」を得られ大事なことです。そういう意味でも「今日は何の日」を検索するののも一つの手段です。

今からお話することも、「今日は何の日」から気づかされたことです。「左利きの日」があることを皆さんはご存知ですか。因みに2月10日です。その頃はバレンタインデーが近いので、話題はそちらばかりなのですが、今年の2月14日の『京都新聞』夕刊には、「左利きの日」が書かれていました。その記事によると、2月10日は左利きの商品を扱う日本企業が決めた日本の「左利きの日」で、もともとはイギリスで

結成された「レフトハンダーズ・クラブ」という団体が作ったそうです。左利きの人も安全に使える道具の開発製造を、各種メーカーに促すために制定されました。8月13日が国際的な「左利きの日」として広く知られているそうです。

今ここにいらっしゃる方の中にも、左利きの方がいらっしゃるかもしれません。私は左利きではありませんが父が左利きです。子どもの頃は羨ましかったです。父はハサミを使う時、「あー疲れた」と言っただけでハサミを持つ手を右手と左手と交互に変えるのです。その様子を見ていて「左利きは良いなあ」と思ったものです。その時の私は知らなかったのですが、父がハサミを右手でも左手でも、どちらでも使えるということは、子どもの頃に訓練されていたからでした。訓練というよりも、左利きを右利きになるように矯正されて育っていたのでした。近年では左利きは「個性」と捉えるようになり、無理に直させることはしない傾向だそうです。実際、父の時代と比べると、左利きの道具も増えていきますし左利き専門店もあります。とはいえ、左利きの商品がお店に普通に並んではいません。日本で左利きの人は推定1割強といわれています。10人に1人は左利きの人ということになります。左利きを個性と捉えるようになっていても、左利きの商品が少なく、割高値段であることは、日常生活では不便を強いられていることが想像できます。

『京都新聞』のその記事担当者も左利きで、いかに不便な生活であるかを書いておられました。例えば急須です。今日ここに急須とコップを持参しました。右利きの私が急須の柄を右手で持つと、何の問題もなく注ぐことができます。ところが急須の柄を左手で持つと、このように注ぎ口は逆になり注ぐことができません。わざわざ急須の向きを変える手間が必要です。この記事を読むまで、全く考えたこともありませんでした。それから、駅の自動改札を通る時の不便さも書いておられました。自動改札を通る時は、体の前で腕を交差させるようにして切符を入れなければならないので、非常に面倒だと書いておられました。言われてみれば確かにそうです。切符投入口は右側にあるので、右利きの私は何の不便もなく投入しています。急須のことも自動改札のことも、この記事を読むまで、左利きの人の不便、面倒であることを全く考えたことがありませんでした。記事担当者は、最後にこのように締めくくっておられました。「『個性』としての認知が進んだとはいえ、日本で左利きは推定1割強と圧倒的少数。一層の理解を得るには体験が一番、右利きの人にはこの機にぜひ、左利き生活を一日お勧めしたい」。

ズキンと胸に刺さる思いです。右利きの人に合わせて、不便を強いられる生活に何も気づかないどころか、子どもの頃、父を見て「両手使えて便利」と勝手に決めつけていた自分が恥ずかしいです。かかわっていなかったから知らなかったならまだしも、身近な存在であったのに気づいていなかったということです。要するに自分を基準として、相手を見ていたということになります。またそれは数の多い者が、その数を力として、数の少ない者を従わせるということでもあり、多い者を基準として、数少ない者より優位であるということです。このように多い者たちを、一つの仲間として基準とすることは、自分たち仲間しか見ていないということです。自分たちだけがかわいい。自分たちだけを愛することになりかねません。そしてその思いは、自分たちの基準に従わない者への攻撃につながる危険性があることに、気づく必要があると思います。

## 神の国

さて、先ほど読んでいただきました聖書箇所は、エルサレム神殿でのイエスと律法学者との論争場面で

す。イエスは律法学者から「第一の戒めは何か」と問われました。「第一の掟はあなたの神である主を愛しなさい」、「第二の掟は、隣人を自分のように愛しなさい」。この二つにまさる掟はほかにないというのがイエスの答えでした。つまり「神を愛すること、自分のように隣人を愛することが最も重要な掟である」ということです。「隣人を自分のように愛する」ということですが、この隣人とは自分のお隣さんの人、お隣さんのように親しい人という意味ではありません。この隣人とは、自分にとって「他者」ということです。「隣人を自分のように愛する」ということは、「他者を自分と等しく愛する」ということです。例えば、できること・できないことがお互い違っていても、それは数などの力によって優先されるものではなく、一人の人としてお互いに等しい立場に立っているということです。どの人も等しく大切な存在であるということです。

イエスと律法学者の問答は続きます。「最も重要な掟である、神を愛すること、自分のように隣人を愛する」ということは、どんな焼き尽くす献げ物やいけにえよりも優れています」と律法学者が言いました。その言葉に対して、イエスは「あなたは、神の国から遠くない」と言いました。神に献げ物をするより、「神を愛し、隣人を自分のように愛する」ことが、「神の国に近づく」ということです。隣人（他者）を自分のように愛すると神の国に近づくということは、神の国とは、一人ひとりが大切にされ、誰もが愛される場所であるということです。

#### 今日は何の日になりますか。

さて、春学期のチャペル・アワーのテーマは、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」です。今日の聖書箇所と同じマルコによる福音書に書かれている言葉です。私たちが神を愛し、私たちが自分のように他者を愛する生き方ができるように悔い改めなさいということです。悔い改めるとは、原語ギリシア語では「視点を変える・見方を変える」という意味です。

最初に左利きのお話をしました。私は『京都新聞』のコラムを読むまで、右利きの生活が優先されると、ほぼ意識することなく生活していました。自分のすぐ身近に左利きの人がいるにもかかわらず、その不便さを想像すらしませんでした。隣人とは、身近なお隣さんのことではないと言いましたが、実際には、自分にとって身近な存在である人のことであっても、理解して寄り添えているとは限らないのです。

昔、同志社大学生時代、キリスト教文化センター主催市民講座の一つ「手話講座」を受講していました。ある時、聾唖の方が来られてお話しされました。ご自身が最も辛かったことは、「社会の差別ということよりも、身近な家族からの扱いだった」と話されました。ある時、外出先から帰ると、自分以外の家族が結婚式から帰って来ていて、その方は結婚式があることすら聞かされていなかったのが、非常に悲しく辛かったという経験談を話されました。

これは私にとって衝撃でした。私の姉は小さい頃から目が不自由、話すのも不自由、左手左足も不自由でした。私は子どもの頃から、身近に障がい者である姉がいたので、障がいということに対しては、他の人よりも敏感な存在だと思っていました。手話講座を受けるまで、その聾唖の方のお話をお聞きするまで、ずっとそう思っていました。ですから本当に衝撃でした。なぜなら、その時気がついたからです。姉はたいいてい留守番だったことを思い出したのです。一緒に旅行に行った時、姉だけは観光バスに残って待っていたことまで思い出しました。姉はどんなに悲しかっただろう。仕方ないとあきらめていたのか、本当は悔しく思っていたのか、その心を知ろうとせず、自分たちを基準に生活していたのです。そのような出来事は、

多々あったうちの一つにすぎないだろうと思います。姉の人生にはいくつもの生きづらさが、家庭の中でさえ、たくさんあったに違いありません。ところが、本当に気がつかなかったのです。その日、私は家に帰り、すごく泣いたことを覚えています。身近であっても、家族であっても、自分と同じように愛しているとは限らないという現実を思い知りました。

とてもよく分かっているはずの家族でさえも、実は分かっていない、自分を基準としてしか見ていなかった。つまり、自分と同じようには他者を愛していない現実に打ちのめされた私でしたが、では、どうすれば他者を自分と同じように愛せるのでしょうか。

聖書には「悔い改めて福音を信じなさい」と、「私たちが、自分のように他者を愛する生き方ができるように悔い改めなさい」ということが記されています。

要するに「悔い改める」必要があるということです。自分の「視点を変える・見方を変える」生き方をしなさいということです。自分を基準としていた視点を変えて、他者に視点を向けるということです。他者の言葉を聞くこと、たとえ言葉がなくても、その人の思いを想像することです。大事なことは、何より他者に対しての想像力を伸ばすことなのです。重要な掟を守るには、他者への想像する力が大事であるということです。

『京都新聞』の記事「一層の理解を得るには体験が一番、右利きの人にはこの機にぜひ、左利き生活を一日お勧めしたい」をお借りして、一つ提案します。

今日一日を、自分の知らない何かの日にしませんか。今日は何の日にしますか。

2018年6月20日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録